

FLORA KANAGAWA

Mar. 10. 2017 No.83

神奈川県植物誌調査会ニュース第 83 号

〒 250-0031 小田原市入生田 499 神奈川県立生命の星・地球博物館内
神奈川県植物誌調査会
TEL 0465-21-1515 ・ FAX 0465-23-8846
e-mail kana-syoku@flora-kanagawa2.sakura.ne.jp



図 1. ジンジソウ (足柄上郡山北町 2016.10.10 勝山輝男撮影) .

図 2. ジンジソウ (足柄上郡山北町 2016.10.10 久江信雄撮影) .

ジンジソウを世附で確認

(深町篤子)

2016 年の夏から秋にかけての丹沢調査の際に、ジンジソウ *Saxifraga cortusifolia* Siebold & Zucc. を西丹沢世附の大棚沢、縦ノ木沢の岩壁や倒木上で確認した (図 1, 2). ジンジソウの神奈川県での記録は、林ら (1961) に世附とユースンでの記載があるのみで、『神植誌 88』や『神植誌 01』、勝山ら (1997) でも証拠標本の記録はなかった。原 (1939), 原・金井 (1959), 奥山 (1974) などにおいても、神奈

川県での分布情報は欠いていた。今回の記録は、神奈川県では初めての標本に基づいたものとなる。

ジンジソウは、ユキノシタ科ユキノシタ属の植物で、本州の関東以西、四国、九州の山地に分布する日本固有種である (Wakabayashi, 2001)。関東は分布北東限にあたり、現在、神奈川県周辺の都県 (東京、埼玉、山梨、長野、群馬、栃木) ではレッドリストに記載されている。生育場所は山地の岩場付近に限られ、林道の拡幅や新設、園芸用の採集などが生存の脅威にあげられている。

ジンジソウの葉は、裂けるものから丸みのあるものまであり、この特徴は同属のダイモンジソウ *S. fortunei* Hook.f. にもみられるため、花の無い時期の同定に注意する必要がある。ジンジソウは、ダイモンジソウよりも、ある程度土が溜まったところに生える（大場、2000）とされるが、すみわけているのか、共存しているのか、今後の現地での識別と記録が重要であろう。また、秋に咲くジンジソウの花は、上の花弁三枚には黄色の斑点があり、下の花弁二枚は長く、葯はオレンジ色で（図2）、直立した花序はよく目立った（図1）。春に咲くハルユキノシタ *S. nipponica* Makino の花と似ている。山地の沢そばの岩壁に生育するこれらユキノシタ属の種が、今後も流域内での再生産が可能であるように見守っていきたい。

標本：足柄上郡山北町 勝山輝男・深町篤子・久江信雄 2016.10.10 KPM-NA0207958 ほか。

引用文献

原 寛, 1939. ユキノシタ科. 大日本植物誌 . pp.42-

45. 三省堂, 東京.

原 寛・金井弘夫, 1959. Map 19 ジンジソウ. 日本種子植物分布図集第2集. 井上書店, 東京.

林 弥栄・小林義雄・小山芳太郎・大河原利江, 1961. 丹沢山塊の植物調査報告. 林業試験場研究報告, (133):1-128, pls.1-16.

勝山輝男・高橋秀男・城川四郎・秋山守・田中徳久, 1997. 第7章 植物相とその特色 I 種子植物・シダ植物. 丹沢大山自然環境総合調査報告書, pp.543-558. 神奈川県環境部, 横浜.

大場達之, 2000. ジンジソウ (ユキノシタ科). 山溪カラー名鑑 山の植物誌 . pp.100-101. 山と溪谷社. 東京.

奥山春季, 1974. 日本植物ハンドブック . x+783pp. 八坂書房, 東京.

Wakabayashi, M., 2001. *Saxifraga* L. in Iwatsuki, K., Boufford, D. E. & Ohba, H. eds, *Flora of Japan* Vol.IIb. pp.47-56. 講談社, 東京.

マメ科の日本新産帰化植物 2 種

(佐々木あや子)

(1) ケブカエニシダ (久江信雄氏新称) *Cytisus striatus* (Hill) Rothm.

相模原市の久江信雄氏がエニシダ属 *Cytisus* の標本を持ってこられた。黄色い花はエニシダにとってもよく似ているが、茎の様子が違う。従来のエニシダ *Cytisus scoparius* (L.); *Spartium scoparium* L. の茎には4-5本の強い稜があるのに対し、8本の弱い稜があり、稜と稜の間の溝には細毛が見られた。

この標本には、花のみで豆果がついていなかったが、その後、同個体の豆果のついた標本を持って来て下さった。豆果の形や大きさはエニシダによく似ているものの、果皮に長く白い軟毛が密生していて、エニシダの豆果とは明らかに異なっていた。そこで『*Flora Europaea* Vol.2』(Tutin et al., 1968) を調べたところ *C. striatus* (Hill) Rothm. であることが判明した。標本を採集された久江氏は、この豆果を見たときからケブカエニシダと呼んでいたようで、和名をケブカエニシダとした。以下に特徴を記す。

茎は直立し、枝を多く分枝する。枝や茎は円筒で8本ほどの細い溝があり、細毛を密生する。葉は3小葉、または2小葉、枝の先端部が1小葉となる。小葉は狭楕円形～広線形、長さ7～12mm、幅2～5mm、葉柄の長さは2mm、葉の表面はまばらに毛が有り、裏面は圧毛が密生する。花は葉

腋に1～2個付き黄色、旗弁は卵形で長さ15mm、翼弁と舟弁はほぼ同長、長さ18mm、萼は2～3mmで2唇し、有毛、花柄は6～7mm、豆果は長楕円形、長さ3～3.5cm、幅1～1.2cm、偏平、長白軟毛におおわれる。

2016年11月末、相模原市の菅沼広美さんと久江信雄さんがケブカエニシダの生育地を案内してくださいました。広い林道の法面にはススキやウツギの中に、エニシダ類がたくさん見られた。お二人の話によると、そこにはエニシダとシロエニシダ、そして今回のケブカエニシダの3種のエニシダ属の花が見られるようだ。

標本：足柄上郡山北町玄倉小管沢 (YA-6) 2016.5.29 勝山輝男 KPM-NA0206853；相模原



図1. ケブカエニシダの実 (相模原市緑区青根 2015.7.11 久江信雄撮影)。

市緑区青根 (TS-3) 2015.8.8 久江信雄 (KPM-NA0204875) .

(2) オオトックリツメクサ (松本雅人氏新称)
Trifolium setiferum Boss.

大和市の松本雅人氏からトックリツメクサ *T. vesiculosum* Savi によく似たツメクサ属の標本が届けられた。この標本は、2015年10月10日に松本・勝山が『The Genus Trifolium』(M.Zohary & D.Heller, 1984) を調べ、*Trifolium setiferum* Boss. と同定されていた。筆者も Zohary & Heller (1984) により、同様の結論を得た。採集者の松本氏は、この植物をオオトックリツメクサと仮称されていたので、日本新産の帰化植物としてオオトックリツメクサと和名を新称した。以下に特徴を記す。

1年草、茎は地上を這い、ところどころの節から根を出し、斜上する。葉は長い柄を持ち、上部にいくにしたがい葉柄は短くなる。葉は3小葉、小葉は楕円形、両面無毛、縁には細かく鋭い鋸歯がある。托葉は披針形、長さ1.5~2cm、多くの脈がある(図1左)。花序は長さ1.5~4cmの柄があり径約2cm、球形~広卵形、花冠は長さ1.2~1.5cm、淡紅色でほとんど無柄、旗弁は長楕円形で先は細く尖り、翼弁、竜骨弁より長い。萼は8~9mm、20~30本の強く目立つ脈があり、萼筒は萼裂片と同長またはやや長く、萼裂片はしだいに細くなり先は鋭く尖る。苞葉は披針形、萼筒とほぼ同長(図1右)。花後、

萼筒は膨らみトックリ状となり萼裂片はやや反り返る。今回の調査で帰化が確認された。原産地は南イタリヤ、ギリシヤ、アルバニア、セルビア、西トルコ。標本：相模原市田名横山 (SA-3) 2009.6.10 松本雅人 KPM-NA0208020.

引用文献

- Zohary M. & D.Heller, 1984. The Genus *Trifolium*. x+606pp. Jerusalem, The Israel Academy of Science and Humanities.
Tutin T.G., et al., 1968. *Flora Europaea*, Vol. 2. xxvii+469pp. Cambridge University Press, London.

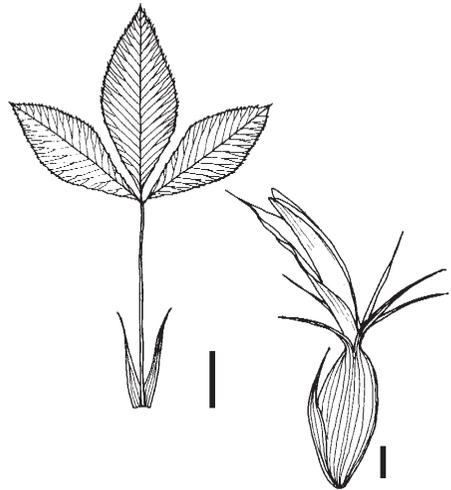


図1. オオトックリツメクサ. 左: 葉. 右: 花.

アカネ科の帰化植物ハリフタバモドキ

(勝山輝男・鹿野沙耶香)

箱根やぶこぎ会の2016年最後の調査は、11月12日、鹿野・井上・清水・松浦・高田の5名で箱根湯本周辺で行われた。その際に箱根町湯本のミカン畑でアカネ科ハリフタバ属 *Spermacoce* に似た不明植物が採集された(図1)。現場は除草が行き届いたミカン畑で、所々に地面の露出した所があり、ウリクサやゼニゴケ類が生えていた。不明植物は畳8~10畳ほどの範囲に十数株が点在していた。

ハリフタバ属は、日本にはハリフタバ *S. articularis* L. が南西諸島に自生し、ナガバハリフタバ *S. remota* Lam.; *S. asurgens* Ruiz & Pav., アメリカハリフタバ *S. glabra* Michx., ヒロハフタバムグラ *S. alata* Aubl.; *S. latifolia* Aubl., マルバフタバムグラ *S. prostrata* Aubl. の4種が帰化している。『神植誌01』には、ヒロハフタバムグラとマルバフタバムグラの2種が神奈川県新記録として掲載されている。

ハリフタバ属は果実は縦に二つに割れて2個の

種子を出す。問題の植物の果実はゴキヅルやオオバコなどのように横に割れて2個の種子が出る。ハリフタバ属に近縁別の属の植物と考え、まず『Flora of China』(Chen Tao & Taylor, 2011) から調



図1. ハリフタバモドキ (足柄下郡箱根町湯本 2016.11.12 勝山輝男撮影) .

べ始めたところ、*Mitracarpus* 属の果実が横に裂開し、中国には *Mitracarpus hirtus* (L.) DC. 1 種のみがあり、図が漢字版の中国植物誌 (Ko Wancheung, 1999) に掲載されていた。その記載や図から箱根町の植物は *M. hirtus* に間違いがないと確信した。念のため『Flora of Ceylon』(Ridsdale, 1998), 『Flora of Bhutan』(Mill, 1999), 『Flora of Hawaii』(Wagner et al., 1990) を参照した。

生命の星・地球博物館の収蔵資料管理システムの学名辞書に *M. hirtus* を登録しようとしたところ、異名とされる *M. villosus* (Sw.) DC. がすでに登録されていた。調べてみると、2011 年に宮崎県で採集され、同定依頼を受けた標本が収められていた。自分で同定していて忘れていたものである。宮崎県小林市の菓草園で採集され、斉藤 (2012) により *M. hirtus* として宮崎県への帰化が報告されていた。同定にあたって和名をつけなかったためか、この報告でも和名はつけられていない。試しに Y-List (米倉・梶田, 2003-) で *M. hirtus* を検索したところハリフタバモドキの和名がつけられていた。和名の出典は不明であるが、ハリフタバモドキ *M. hirtus* で標本を登録した。

今回採集された標本は草刈等で一度切られ、枝分かれした個体のため、葉は全体に小型化し、草丈も低いものである。全体や葉の大きさなどを宮崎県産の標本で補って形態の記載を行った。

1 年草。茎は直立し、高さ 10-60 cm, 断面は四角形で、全体に立った毛が密生する。葉は対生し、柄は短く、葉身は長楕円形で長さ 1-4cm, 幅 5-15mm, 基部はくさび形、先は尖り、全縁、縁や両面に微細な突起毛があり、ざらつく。托葉は広い楕円形、膜質、先は剛毛状に裂ける。花は両性、茎頂および葉腋に多数が集まってつき、ほとんど無柄。萼筒は長さ 1-1.5mm, 有毛、萼裂片は 4 個、2 片は長く、披針形で緑色、長さ 1.5-2mm, 2 片は短く、広線形で白色、長さ 1-1.5mm, ともに縁毛がある。花冠は筒状で白色、長さ 1.5-2mm, 先は 4 裂する。果実は萼に包まれ、長さ 1-1.5mm, 幅約 1mm, 熟すと基部 1/3 あたりで横に裂開し、2 種子が出る。種子は楕円状の長方形で長さ約 1mm, 背面は鈍い凹凸があり、腹面はへそから 4 本の溝が放射状に伸びる。

分布と生態：世界の熱帯に広く分布する雑草。

標本：箱根町湯本 (HAK-5) 2016.11.12 箱根やぶこぎ会 (鹿野・井上ほか HYB-20161112-9) KPM-NA0300906; 宮崎県小林市野尻町 2011.11.15 坂本尚俊 KPM-NA0200835.

引用文献

- Chen Tao & C. M. Taylor, 2011. *Mitracarpus*. in Flora of China Editorial Committee ed., Flora of China, Vol.19. pp.217-218. Science Press & Missouri Botanical Garden Press, Beijing & St. Louis.
- 勝山輝男, 2001. アカネ科ハリフタバ属. 神奈川県植物誌調査会編, 神奈川県植物誌 2001. pp.1150-1151. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- Ko Wancheung, 1999. *Mitracarpus*. in Chen Weichiu ed. Flora Reipublicae Popularis Sinicae, Thomus, 71 (2), Rubiaceae. pp.210-212. Science Press, Beijing.
- Mill, R. R., 1999. *Mitracarpus*. in D. G. Long ed. Flora of Bhutan, Vol.2 Part 2. pp.820-821. Royal Botanic Garden Edinburgh & Royal Government of Bhutan.
- Ridsdale, C. E., 1998. Rubiaceae. in Dassanayake et al ed., A revised handbook of the Flora of Ceylon, Vol.12. pp.141-343. Balkema, Rotterdam.
- 斉藤政美, 2012. 近年の帰化植物情報. 宮崎県立博物館研究紀要, (32): 37-42.
- Wagner, W. L., D. R. Herbst & S. H. Sohmer, 1990. Manual of the Flowering Plants of Hawai'i. 1853pp. Bishop Museum, Honolulu.
- 米倉浩司・梶田 忠, 2003-. BG Plant 和名-学名インデックス (Y-List) . <http://ylist.info> (2016 年 12 月 11 日) .

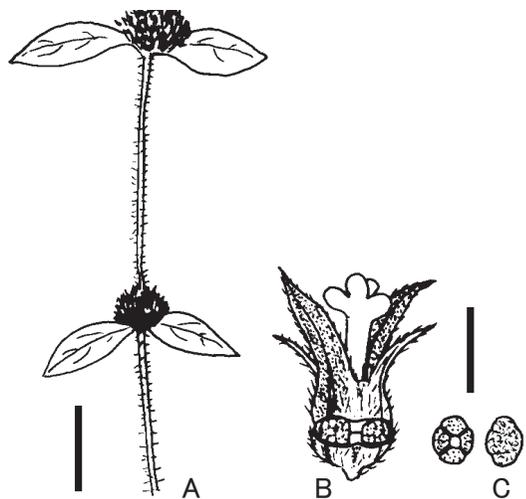


図 2. ハリフタバモドキ *Mitracarpus hirtus* (L.) DC. (A: 花序 B: 果実 C: 種子. スケール A: 1 cm B, C: 1 mm) .

多摩川河口のウラギク健在 ?!

(田中徳久)

2016 年 10 月 29 日, ふと思い立って, 多摩川河口へウラギクを確認に行った。思い立っても何

も、新しい植物誌ではシオン属 *Aster* を担当しているの、当たり前でもある。

筆者が多摩川河口のウラギクを確認したのは、1995年。川崎市自然環境調査においてであり、標本も採集した (KPM-NA0104704 ほか)。その際の採集場所は、堤防の河川側斜面 (あるいは河川敷のグラウンドの河川側斜面) と川辺のヨシやアイアシの群落との間の帯状立地に生育していたものである。何しろ20年以上前のことであり、記憶もあやふやであったが、河口から上流に向かって探索した。河川敷の利用形態も変わり、護岸整備も進んだためか、なかなか見つからない。未練がましく、少年サッカーが行われているグラウンドの河川側を、子どもたちを避けながら歩いた。一眼レフのカメラを首から下げた、ほとんど不審者である。

しかし、グラウンドと河川の間、ヨシなどの高茎の川辺の植物群落が途切れ、河川へ出られる川辺で遂にウラギクを見出した (図1.2)。附近には、3群落ほどがあり、花茎自体は20本ほどが確認出来た。しかし、近づいてみると、根本で分枝しており (図3)、個体数は10株を切っていると思われた。また、生育地は、護岸の砂利が流されないようにアミ上のマット (図3) をかぶせた場所であり、氣息奄々という感じであった。記録として、地上部のみを採集して標本とした。しかし、何とか健在 (状況が状況なのでタイトルには「?!」を付した) であることを確

認したので、報告する。

神奈川県内のウラギクの産地は川崎市川崎区、横浜市金沢区、三浦半島で、詳細な採集場所は不明なものもあるが、三浦半島では絶滅、横浜市金沢区の産地は、『神植誌88』の調査で確認された幸浦では消失したが、その後、長浜公園で記録されている (渡辺, 2016) 川崎市川崎区の産地は今回現存が確認されたが、1995年に確認された場所とは多少異なる。なお、川崎区のウラギクについては、宮脇 (1972) や宮脇ほか (1981) に植生調査資料と写真が示されており、多摩川河口には、現在より広い範囲に多数のウラギクが生育していたことが示されており、宮脇ほか (1981) には、東扇島の埋立1年後にウラギクが生育している写真が示されている。

標本：川崎市川崎区大師河原 2016.10.29 田中徳久
KPM-NA0216261.

引用文献

- 宮脇 昭ほか, 1972. 神奈川県内の現存植生. 789pp. 付別冊表・着色植生図. 神奈川県教育委員会, 横浜.
- 宮脇 昭ほか, 1981. 川崎市および周辺の植生—環境保全と環境保全林創造に対する植生学的研究—. 211pp. 付別冊表・着色植生図. 横浜植生学会, 横浜.
- 渡辺重彦, 2016. ウラギク (*Aster tripolium* L.). 横浜植物会年報, (45): 34-35.



図1. ウラギクの生育地 (川崎市川崎区 2016.10.29 田中徳久撮影) .



図2. ウラギクの生育地 (図1と同じ) .



図3. 根元で分岐するウラギクとアミ上のマット (図1と同じ) .

『寺崎日本植物図譜』に含まれる神奈川県産の植物

(小野有紀子・木場英久)

去る2016年春の総会時に、大場達之氏から『寺崎日本植物図譜』(奥山編, 1979) には、標本にもとづく植物画が掲載されていて、採集日や採集場所も

明記されていることも多く、これには標本記録と同等の価値があるので、神奈川県産の植物を抽出して、新しい植物誌に引用したらよいのではないかという主旨の提案がなされた。著者の一人、木場は、とても良いアイデアだと思ったが、古い文献なので高価で手に入れにくいのではないかとそのときは思っ

ていたので、「大場先生がご自身でリストアップして、FLORA KANAGAWA に投稿されてはいかがか」と発言してしまった。

ところが、もう一人の著者、小野（木場の研究室で2017年度に卒業研究をする予定の桜美林大学学生）は、ネットを調べて、送料込みでわずか4,100円で売っている古本屋さんを見つけてきた。さっそく入手し、小野が鉢巻をして、歯を食いしばって全ページをめくって、神奈川県の記事をリスト化した（ここまで木場は研究費の中から4,100円を支出し、成果を見て笑顔で拍手をただけのことである）。

この文献には、4,000件を越す図版が掲載されていて連番がつけられている。ときには図版の番号にA、Bのように枝番号を振り、花の状態と果実の状態を描くために、複数の採集日が書かれていること（たとえばナギ）があったり、2ヶ所の地名が書かれている場合（例えばセンダン）があったりする。本報告では標本に準ずる情報源となることを目的にしているため、このような場合は1種を2行に分けて表記した。

地名は、原文のままリストに載せた。ただし、多くの場合、地名に「(神奈川県)」と付記してあったが、スペースの節約のために省略した。ひとつだけ例外があり、ヒゴスミレの地名「陣馬山」については、東京都と神奈川県の境を指すものなのでそのままにした。また、現在では相模川の上流の山梨県部分を桂川と呼んでいるようであるが、ヤシャゼンマイでは「桂川(神奈川県)」、シギンカラマツでは「桂川中流(神奈川県)」と表記されていた。当時の呼び方をよ

表1.『寺崎日本植物図譜』に掲載されている神奈川県産の標本に基づく植物画一覧。

頁	図番号	和名	地名	日付
13	42	ヤシャゼンマイ	桂川	5月中旬
16	56	ハイホラゴケ	逗子・神武寺山	1934.3.4
17	63	フモトカグマ	逗子・神武寺山	1941.10.17
25	91	タチシノブ	鎌倉	
40	150	オリヅルシダ	鎌倉・江の島	5月
43	161	オニヤブソテツ	三崎(三浦市)	8月
43	163	ヤマヤブソテツ	逗子・神武寺山	1935.9
45	169	オニカナワラビ	江の島	10月
45	172	リョウメンシダ	真鶴岬	
47	179	イワヘゴ	箱根・塔之沢	10月
50	191	オオイタチシダ	逗子・神武寺山	1934.3.4
53	203	ハシゴシダ	横浜・本牧	1934.10
60	231	コモチシダ	逗子	10月
71	271	クリハラン	箱根・湯本	10月中旬
93	359	ナギ	三浦半島・西浦 真鶴岬	
93	360	イヌガヤ	逗子	
126	482	イタビカズラ	鎌倉	2月
127	485	ヒメイタビ	逗子・神武寺	10月中旬
137	525	ラセイトソウ	逗子海岸	8月下旬
160	617	ツルナ	逗子	8月上旬
177	679	ハマナデシコ	三浦半島・城ヶ島	8月下旬
180	693	ハマアカザ	逗子海浜	8月下旬
196	752	ヤブニッケイ	三浦半島	11月中旬
197	755	タブノキ	逗子	5月下旬
204	783	シギンカラマツ	桂川中流	8月下旬
215	828	スハソウ	鎌倉・建長寺裏山	3月末
216	834	シロバナハンショウヅル	鎌倉	1942.5.3
239	921	ランヨウアオイ	大山	1935.5.31
265	1019	ハナハタザオ	平塚(平塚市)	1934.6.4
273	1053	グンバイナズナ	横浜近郊	5月中旬
274	1056	コシミノナズナ	横浜	5月下旬
279	1071	ハマダイコン	由比ヶ浜	5月中旬
291	1119	タイトゴメ	江の島	1935.1.29
293	1126	ヒトツバシヨウマ	宮ヶ瀬・貝崖(愛甲郡清川村)	
308	1190	タマアジサイ	逗子・神武寺	8月下旬
309	1195	アマチャ(『神植誌01』に掲載なし;栽培品か?)	登戸(川崎市)	1941.7.6
321	1239	フユイチゴ	逗子・神武寺山	1935.9月中旬
323	1246	カジイチゴ	江の島	5月下旬
336	1302	ツルキジムシロ	箱根・金時山	1918.5.20
345	1334	マルバシャリンバイ	逗子・長者ヶ崎	6月
351	1357	マメザクラ	大磯・高麗山	1934.4.8
357	1382	バクチノキ	早川(小田原市)	1933.3.29
379	1463	キハギ	逗子	8月末
381	1465	マルバハギ	三浦半島・油壺	1936.9.1
383	1478	シナガワハギ	浦賀	6月下旬
385	1484	ツルナシヤハズエンドウ	浦賀・久里浜	4月下旬
384	1488	ヒロハクサフジ	江の島	1935.6.29
388	1498	ハマエンドウ	江の島	5月下旬
391	1507	ヤブマメ	三浦半島	1933.11.12
403	1555	ハマビシ	浦賀	8月下旬
413	1593	オオニシキソウ	馬入川畔	10月中旬
432	1664	センダン	鎌倉 真鶴	5月下旬

く知らないが、これらが本当に神奈川県内を指しているかどうかは検討すべきである。

この文献では、多くの場合、栽培植物や移植されたもの、市販のものを描いた場合には、たとえばハクモクレンでは「東京〔栽培〕4月上旬」のように、そのことが地名と日付の間に括弧に入れて明記されている。後述するようにこれ以外にも野生植物ではないものがあるかもしれないが、このように明記されている種類を省いて、神奈川県内の地名が書かれている例をリストに載せた。このほかにも「東京近郊」と表記されたものが497件もあるが、神奈川県内であると特定できないのでリストには含めなかった。

また、『神植誌 01』に見出しが掲載されていない和名については、() 内に見出しの和名あるいはメモを記した。

イネ科の数種についてコメントすると、ワセオバナは、植『神植誌 01』には湘南と三浦の記録しかないが、東京湾側にもあったことが分かった。アイアシも海辺に生える植物で、『神植誌 01』には、多摩川と三浦半島に分布点があり、泥亀町(横浜市金沢区)の標本記録があることを記しているが、鶴見にもあったことが分かった。また、キビは、栽培とは明記されていないが、本文中に「古くから田畑に栽培される」と書かれているので、栽培品を描いたものかもしれない。この文献中の他の例を見ると、神奈川県産ではないが、シランには「本州中部から西に自生するが、観賞用に栽培する。」とだけあり地名と日付の間には「栽培」とは書かれていない。また、タキキビも都内に野生状態で生えているとは考えにくい

表 1. (続き) .

頁	図番号	和名	地名	日付
434	1672	ドクウツギ	馬入川畔	10月中旬
442	1701	コミネカエデ	箱根	
459	1758	マユミ	鎌倉	1月末
461	1763	モクレイシ	大磯・高麗山	3月上旬
465	1777	フッキソウ	箱根・芦ノ湖	7月
470	1796	ケンボナシ	逗子	6月末
487	1857	オニシバリ	鎌倉・金泉山	3月下旬
490	1871	マルバグミ (オオバグミ)	真鶴岬	2月上旬
490	1872	ツルグミ	鎌倉 大磯・高麗山	11月
503	1923	ヒゴスミレ	陣場山 (東京都・神奈川県)	1934.4.26
540	2057	カクレミノ	江の島	
554	2105	ハマゼリ	逗子	8月下旬
555	2111	イワニンジン	丹沢	1939.9.24
559	2122	ミヤマニンジン	箱根・神山	10月中旬
561	2132	ヒメイワカガミ (神奈川県内のものはアカバナヒメイワカガミ)	箱根・神山	
568	2161	ハコネコメツツジ	箱根・二子山頂	7月上旬
596	2266	ハマボッサ	三崎 (三浦市)	8月
603	2291	コイワザクラ	箱根・駒ヶ岳	5月下旬
611	2316	タンナサワフタギ	箱根	1937.5.30
621	2350	オカイボタ	三浦半島	1937.11.8
631	2386	ムラサキセンブリ	三浦半島	1933.11.12
639	2418	フナバラソウ	横浜市	5月末
639	2419	イヨカズラ	鎌倉	6月上旬
640	2422	ガガイモ	馬入川畔	6月末
653	2470	アリドオシ	江の島	
654	2480	ヤブムグラ	登戸 (川崎市)	1935.11.10
657	2482	ヤマムグラ	鎌倉	6月上旬
661	2500	ハマヒルガオ	片瀬・海浜	6月下旬
665	2516	マメダオシ	平塚	8月下旬
675	2552	ハマゴウ	逗子	8月上旬
677	2562	イワダレソウ	三崎・城ヶ島 (三浦市)	8月下旬
686	2597	トラノオジソ	丹沢・秦野峠	1939.9.24
689	2608	イヌトウバナ	丹沢・秦野峠	1939.9.24
693	2623	タニジャコウソウ	逗子・神武寺山	1933.10.9
695	2633	マネキグサ	三浦半島・田浦	1939.9.17
716	2715	スズメノトウガラシ (図から判断してエダウチスズメノトウガラシ)	登戸 (川崎市)	1935.10.11
742	2806	イワタバコ (産地からみてケイワタバコ)	鎌倉 逗子・神武寺	7月下旬
743	2811	ハマウツボ	平塚・海浜	1934.6.4
748	2831	トウオオバコ	逗子	8月下旬
756	2861	メツクバネウツギ (オオツクバネウツギ)	与瀬 (津久井郡相模湖町)	1937.4.25
779	2951	ミヤマヨメナ	箱根・芦ノ湖畔	5月中旬
781	2960	タテヤマギク	箱根・神山	10月中旬
796	3017	ヒメガンクビソウ	逗子・神武寺境内	8月下旬
796	3019	コヤブタバコ	馬入川畔	10月中旬
801	3034	キバナコスモス	登戸 (川崎市)	1941.9.14
802	3042	ネコノシタ (ハマグルマ)	三崎 (三浦市)	8月下旬
813	3077	イソギク	三崎 (三浦市)	11月下旬
812	3080	リュウノウギク	箱根	10月中旬
851	3222	カコマハグマ	向ヶ丘 (川崎市)	1938.10.10
853	3230	ハチジョウナ	逗子海岸	8月下旬
855	3239	オオニガナ	向ヶ丘 (川崎市)	1935.10.24
855	3240	ハマニガナ	鎌倉・片瀬	9月下旬

「栽培」とは書いてなく「小石川植物園」とだけ書いてある。ほかにも多くの同様な例がある。本文中に栽培と書いてあったり、地名から栽培と判断できる場合には、特記するまでもないということであろうか。

草本性イネ科以外については意義をよく理解していないが、オニカナワラビ(江ノ島)、ハシゴシダ(横浜・本牧)、ナギ(真鶴岬)、オオイトスゲ(シロイトスゲ;大磯・高麗山)、オオテンツキ(ナガボテンツキ;鶴見)、シオクグ(七里ヶ浜)、ハマアカザ(逗子海岸)、ドクウツギ(馬入川畔)、ハマゼリ(逗子)、イヨカズラ(鎌倉)、フナバラソウ(横浜市)、マメダオシ(平塚)、ハマウツボ(平塚・海浜)などは注目すべきものではないだろう。なお、ヒロハテンナンショウ(横浜)も興味深いが、本種は日本海側に産するもので、本文にもそのように記されている。

以上、詳細は不明な部分もあるが、大場氏の言われたとおり、過去の状況を知るために意義深い情報が含まれていた。新しい植物誌の執筆者の皆様の参考になれば幸いである。

引用文献

奥山春季編, 1979. 寺崎日本植物図譜 第2版. 1188pp. 平凡社, 東京.

表 1. (続き) .

頁	図番号	和名	地名	日付
859	3251	ワダン	三崎・油壺	11 月中旬
885	3352	ハマカンゾウ	三浦半島	1933.11.12
915	3467	ハマオモト	三崎	
921	3488	ヒメドコロ	向ヶ丘 (川崎市)	1938.10.10
937	3555	ウラハグサ	箱根・宮ノ下	1934.10.17
941	3568	ナギナタガヤ	横浜市外	1939.6.12
947	3592	ムギクサ	横浜	1939.6.14
958	3638	ギョウギシバ	逗子	8 月下旬
959	3642	オニシバ	片瀬・浦賀	8 月下旬
961	3649	キビ	三崎	1936.9 月末
965	3668	ハマエノコロ	三浦半島	1933.11.12
966	3675	エダウチチカラシバ	横浜	1939.10.25
970	3688	ワセオバナ	鶴見 (横浜市)	8 月下旬
971	3691	ヒメアブラサスキ	大磯・高麗山	11 月上旬
973	3698	ケカモノハシ	鎌倉・片瀬	10 月上旬
973	3701	アイアシ	鶴見 (横浜市)	9 月上旬
983	3732	ハコネダケ	箱根・芦ノ湯平	1937.7.12
1003	3795	ヒロハテンナンショウ (『神植誌 01』に掲載なし;栽培品か?)	横浜	1936.4.30
1009	3817	コガマ	鶴見 (横浜市)	6 月下旬
1009	3818	ヒメガマ	鶴見 (横浜市)	6 月下旬
1010	3825	コウキヤガラ	横浜市	1936.5.25
1014	3843	ビロードテンツキ	鎌倉海岸	8 月下旬
1017	3850	オオテンツキ (ナガボテンツキ)	鶴見・海浜 (横浜市)	9 月上旬
1023	3871	イガガヤツリ	鶴見 (横浜市)	9 月上旬
1023	3874	ハマスゲ	鶴見・海浜 (横浜市)	8 月
1029	3900	コウボウムギ	浦賀・片瀬	4 月下旬
1035	3923	シバスゲ	大磯	1942.3.29
1037	3928	オオイトスゲ (シロイトスゲ)	大磯・高麗山	1942.3.29
1037	3930	ケスゲ	与瀬 (津久井郡相模湖町)	1937.4.25
1039	3938	ヒゲスゲ	三浦半島・油壺	11 月中旬
1047	3968	コウボウシバ	鎌倉・七里ヶ浜	6 月上旬
1047	3969	シオクグ	鎌倉・七里ヶ浜	6 月上旬
1057	4003	ハマカキラン	鶴沼	1935.6.29
1091	4137	アレチウリ	登戸 (川崎市)	1978.9.12 1978.9.27
1093	4144	タチガシワ	大雄山	1978.5.3 1978.8.22
1095	4151	ガンクビソウ (キバナガンクビソウ)	座間市	1978.9.14
1095	4152	オオブタクサ	登戸 (川崎市)	1978.9.12 1978.9.27

カエデ科イタヤカエデ節イタヤカエデの学名考察ならびにカエデ属の使用学名提案

(長谷川 義人)

今回の新植物誌では、カエデ科 (APG III System ではムクロジ科 Sapindaceae, トチノキ科 Hippocastanaceae を合一してムクロジ科 Sapindaceae とする) の記述は、浜口哲一氏の逝去により図らずも不肖長谷川が担当する事になった。

懐えば神奈川県植物誌調査会発足時の顧問、樹木学者の故榎山泰一先生は私の師であり、また生前には 40 数年の永きに亘り友人として処遇して下さったので、この度の仕事には、榎山先生との数ある調査行での研究を振り返り、仕事を進めたいと考えている。

特にイタヤカエデ類縁の Taxa については種々の考え方があって、正しい学名の使用は難しく感じられる。イタヤカエデ節 Sect. *Platanoidea* Pax in Engl.

Bot. Jahrb. 6: 327 (1885)には多数の亜種・変種が提案され、基本種であるイタヤカエデの学名は旧くは *Acer mono* Maxim. in Bull. Phys.-Math. Acad. St.-Pet. 15: 126 (1856) であり、この学名は日本でも中国でも永く使用されている。原 (1954), 緒方 (1965), 北村 (1971), 方 (1979, 1981, 2004), 清水 (1989) などである。しかし、これより古い学名があって、大橋 (1993) は *A. pictum* Thunb. ex Murray, Syst. Veg. ed. 14, 912 (May/June 1784) であるとし、最近ではこの *A. pictum* Thunb. ex Murray がイタヤカエデ類の種名として用いられることが多い。とは言え、筆者はこの学名にも問題があると感じている。「Thunb. ex Murray」については大橋・中井 (1996) に詳しいが、この命名者の扱いは、Thunberg の『Flora Iaponica』(Aug. 1784 発行) より『Syst. Veg. ed. 14』が 2・3 ヶ月早く出版されたことに理由があるが、アンドレア・マレイ Murray, A. は自身の出版された本の中で、Thunberg の出版準備中の草稿を拝借したことを明示しているので、私は種の記載を行ったのは Thunberg であり、Murray ではないので ex Murray は不要であることを以前何かに書いた。Thunberg の業績であることを書中に明示した Murray は大変フェアな人物と考えられる。

さて、Murray は日本へ来たこともなく、資料も持ち合わせていないと考えられる。Thunberg は 1776 年 3 月 4 日に長崎を出立し、同年 6 月 29 日に帰着している。当然 Thunberg の種に対する記述は詳しく Murray の比ではない。余談であるが、Thunberg はお人好しで、帰欧して日本で苦心してこっそりと採集した植物標本を師であるブルマン Burmann 父子 (オランダ) に提供したが、この一部はオランダ商人の博物家ホッタイン Houttuyn に渡り、彼の大著『博物書 *Natuurlijke Historie*』の第 9 巻 (1778) から第 14 巻 (1783) までに 33 種が記載された。この種数は、小泉 (1933) によれば 44 種であると言い、中井猛之進博士は Thunberg がむざむざとその発表の名誉を失ったと書いている。

Thunberg の『FLORA IAPONICA』(1784) は Lipsiae (ドイツ・ザクセンのライプツヒ) 発行で、この書に掲載されている *A. pictum* Thunb. の記載中には「Folia alterna (葉は互生)」としていて、この件は、Murray の書の発行日が先だと言う問題以前に、重大な意味を持つと考える。「葉は互生」は、カエデ科カエデ属では有り得ないからである。このことから中井猛之進・小泉源一は、これをハリギリ *Kalopanax pictum* Nakai とすべきであるとした。これは『FLORA IAPONICA』刊行の前

年に出版された「Kaempferus Illustratus II」(1783; Nova Acta Regiae Societatis Scientiarum Upsaliensis, Vol IV, pp.31-40) の *A. pictum* Thunb. も同様である。分布の件では Thunberg は「Crescit in regionibus Fuji et Fakoniae」としていて富士・箱根地域を挙げ、十分にハリギリの産地である。

しかし、Thunberg の著作論文中には「カエデ科についての植物学学位論文」(11 Oct. 1793; DISSERTATIO BOTANICA, DE ACERE, pp.1-12. UPSALIAE スウェーデン, ウプサラ刊) と言うカエデ属の単行論文があり、これは師 Thunberg が、弟子 Yohannes Laur ASCHAN のために書いた学位取得論文である。当時は弟子が印刷費を負担することで、師が弟子のために論文を書いた風習があったと中井猛之進は書いている。ここにも *A. pictum* Thunb. が掲載されているが、葉の記載には「Folia opposita (葉は対生)」としてあり、十分にカエデ属の特徴に合致する。ここで問題となるのは同一の学名の記載に「互生」(1784) と「対生」(1793) の相反する特徴の記述である。これを資料の混乱による混合品と考えるか、先行論文の誤りを 1793 年に訂正したと考えるかによって結論は異なるが、中井猛之進は記載内容からいづれもハリギリと結論した。

イタヤカエデの学名を *A. pictum* Thunb. Dissert. Bot. Acer. 4,5 et 7 (1793) とすれば、イタヤカエデの学名として Fl. Iap. 162(1784) がカエデ属でないことで、一応 *A. mono* Maxim. の former synonym (先行の同物異名) となるかと思われるが、筆者は別の見解である。中井 (1935) は 1793 年の論文の中の *A. pictum* Thunb. は *A. mono* Maxim. であると注釈し、*A. septemlobum* Thunb. はハリギリであると言う見解を示している。ただし、中井のその後の変種発表では (1942; 植物研究雑誌など)、*A. mono* Maxim. の下位 taxa で記載しており、モトゲイタヤ、オニイタヤ、エゾイタヤなどで *A. pictum* Thunb. を使用されなかった。

筆者は、以上のように Thunberg の見解が混乱していたので、従来の研究者は *A. mono* Maxim. をイタヤカエデ節の基本種 elementary species の学名としていたと考えている。Maximowicz の学名を使用するか Thunberg の学名を使用するか、基本種に対する見解は研究者によって分かれると考えられる。筆者は *A. mono* Maxim. が多くの研究者に支持されてきたことを考えると、単に later synonym ではなく、Thunberg の学名が混合品であって 9 年後の発表も訂正であることのコメントもない homonym (異物同名) と考えられるので、この Maximowicz の学名

を採用することは間違いではないと信じている。確実な最初の有効出版は Maximowicz (1856) であり、この学名こそが正しいと考える。

大橋 (1993) は「Nomenclature of *Acer pictum* Thunberg ex Murray and its Intraspecific Taxa (Aceraceae)」において、詳細な検討を加えて論述したが、多くの亜種とともに var. *pictum* はオニイタヤに、var. *mono* はエゾイタヤに充当している。また最近の通説は *pictum* のエピソードはイタヤカエデ (広義) としている (邑田・米倉)。最も普通にあつて基本種 Elementary species と思われるイタヤカエデに正当な学名がない事態に対して深く憂慮するものである。大橋 (1993) では出版年の問題が詳しく取上げられてはいるが、記載の内容について Thunberg の『Flora Iaponica』掲載の *A. pictum* はカエデ科カエデ属ではないので、これを最も古い最初の発表とすることは出来ない。また水島正美の「エンコウカエデはイタヤカエデの幼形」とする説にも筆者は反対の立場であり、このことは長谷川 (2016; 横浜植物学会報, Vol.47, No.3) に意見を述べた。筆者は故大

井次三郎博士や故津山 尚博士の弟子として亜種 subspecies を考えていないので、語弊は悪いが、光学プリズムを通した光の散乱した虹のように今回は全て変種 varietas でまとめたと考えている。

ただし var. *marmoratum* Nicholson フイリイタヤカエデなどについては、どの植物にも表れる現象で学名を付する意味が薄く、もっとも斑入には師の遺伝学者故笠原基知治氏の解説にも各種の原因 (区分キメラ斑: ウリハダカエデの「初雪」、ヤマモミジの「松が枝」など、細胞質遺伝斑、模様斑、病理斑など) があり、成因も一律ではない。

余談となるが、筆者の楊柳学の師、故木村有香博士の話をご披露しておく。カエデの *Acer* は「鋭」の意味でラテン語の発音は名詞で「アケール」、形容詞では「アーケル」になるとのことで、GEORGES のラテン・ドイツ語辞典 (1972; ドイツ・ハノヴァー刊) で調べたとのことであった。この書は上巻 pp.3107 下巻 pp.3575 の大著で、筆者も所有するが、今は調査の時間はない。

以下に、カエデ属で使用したい学名の一覧を私見として公表しておきたい。

- +Sect. 1. *Cissifolia* Koidz., Rev. Acerac. Jap.: 26 (1911) ミツデカエデ節
- +*Acer cissifolium* (Sieb. et Zucc.) K. Koch in Miq., Ann. Mus. Bot. Lugd.-Bat. 1: 252 (1864) ミツデカエデ
- +Sect. 2. *Arguta* Rehder in Sarg., Trees & Shrubs 1: 181 (1905) アサノハカエデ節
- +*Acer argutum* Maxim. in Bull. Acad. Imp. Sci. St.-Petersbourg 12: 226 (1867) アサノハカエデ
- +Sect. 3. *Macrantha* Pax in Engl., Bot. Jahrb. 6: 328 (1885) ウリカエデ節
- +*Acer rufinerve* Sieb. et Zucc. in Abh. Math.-Phys. Cl. Koenigl. Bayer. Akad. Wiss. 4(2): 155 (1845) ウリハダカエデ
- +*Acer capillipes* Maxim. in Bull. Acad. Imp. Sci. St.-Petersbourg 12: 225 (1867) ホソエカエデ (ホソエウリハダ)
- Acer morifolium* Koidz. in Bot. Mag. Tokyo 28: 151 (1914) ヤクシマオナガカエデ
- Acer insulare* Makino in Bot. Mag. Tokyo 24: 293 (1910) シマウリカエデ (オナガカエデ)
- +*Acer crataegifolium* Sieb. et Zucc. in Abh. Math.-Phys. Cl. Koenigl. Bayer. Akad. Wiss. 4(2): 155 (1845) ウリカエデ
- +*Acer tschonoskii* Maxim. in Bull. Acad. Imp. Sci. St.-Petersbourg 31: 24 (1886) ミネカエデ
- Acer australe* (Momotani) Ohwi et Momotani ex Ohwi in J. Jap. Bot. 41: 54 (1966) ナンゴクミネカエデ
- +*Acer micranthum* Sieb. et Zucc. in Abh. Math.-Phys. Cl. Koenigl. Bayer. Akad. Wiss. 4(2): 155 (1845) コミネカエデ
- +Sect. 4. *Distyla* K. Ogata in Bull. Tokyo Univ. Forest no. 63: 115 (1967) ヒトツバカエデ節
- +*Acer distylum* Sieb. et Zucc. in Abh. Math.-Phys. Cl. Koenigl. Bayer. Akad. Wiss. 4(2): 154 (1845) ヒトツバカエデ (マルバカエデ)
- +Sect. 5. *Parviflora* Koidz. in J. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo 32: 11 (1911) テツカエデ節
- Acer nipponicum* H. Hara in J. Jap. Bot. 14: 50 (Jan. 15, 1938) (テツカエデ)
- subsp. *orientale* T. Yamazaki in J. Jpn. Bot. 75: 113 (2000)
- var. *orientale* in J. Jpn. Bot. 75: 113 (2000) キタノテツカエデ
- + var. *koshinense* T. Yamazaki in J. Jpn. Bot. 75: 114 (2000) コウシンテツカエデ
- subsp. *nipponicum*
- var. *nipponicum* in J. Jpn. Bot. 75: 112 (2000) テツカエデ
- var. *australe* T. Yamazaki in J. Jpn. Bot. 75: 113 (2000) ナンゴクテツカエデ
- Sect. 6. *Spicata* Pax in Engl., Bot. Jahrb. 6: 326 (1885) オガラバナ節
- Acer ukurunduense* Trautv. et C. A. Mey., Florula Ochot. Phaenog. in Mitterdorff: 24 (1856) オガラバナ (ホザキカエデ)
- +Sect. 7. *Palmata* Pax in Engl., Bot. Jahrb. 7: 198 (1886), sens. emend. カエデ節
- +*Acer sieboldiana* Miq., Ann. Mus. Bot. Lugd.-Bat. 2: 87 (1865) コハウチワカエデ
- +*Acer japonicum* Thunb., Fl. Jap.: 161 (1784) ハウチワカエデ (メイゲツカエデ)
- 注: 原書では *A. iaponicum* である
- +*Acer tenuifolium* (Koidz.) Koidz. in Bot. Mag. Tokyo 30: 327 (1916) ヒノウチワカエデ
- +*Acer shirasawanum* Koidz., Rev. Acerac. Jap.: 38, t. 22 (1911) オオイタケメイゲツ
- +*Acer palmatum* Thunb., Fl. Jap.: 162 (1784) イロハモミジ (タカオカエデ)
- 注: 原著は『FLORA IAPONICA』である。
- Acer amoenum* Carriere in Rev. Hort. 39: 280 (1867)

- + var. *amoenum* オオモミジ
 var. *matsumuray* (Koidz.) K. Ogata in Bull.Tokyo Univ.Forest no.60:26(1965) ヤマモミジ
 var. *nambuianum* (Koidz.) K. Ogata in Bull.Tokyo Univ.Forest no.60:26(1965) ナンブコワモミジ
 + Sect. 8. *Platanioidea* Pax in Engl., Bot.Jahrb.6:327(1885) イタヤカエデ節
Acer mono Maxim. in Bull. Phys.-Math. Acad. St.-Pet. 15:126(1856)
 + var. *mono* イタヤカエデ
A. pictum Thunb.,Dissert.Bot. de Acere 4 et 7(1793) var. *pictum* ; *A. pictum*.Thunb.var. *mono* (Maxim.) Korsch.in Act.Hort.Petrop.12:318(1892)
 + var. *dissectum* (Wesmael) Honda in B.M.T. 46:371(1932) エンコウカエデ (アサヒカエデ)
A. pictum var. *dissectum* Wesmael in Bull.Soc.Roy.Bot.Belgique 29:56(1890)
 + var. *connivens* (G.Nichols.) H.Hara, Enum.Sperm. Jap. 3:105(1954) ウラゲエンコウカエデ
A. pictum var. *connivens* G. Nicholson in Gard.Chron.ser.2,16:375(1881)
 + var. *trichobasis* Nakai in J.J.B.18:611(1942) モトゲイタヤ
A. pictum var. *trichobasis* (Nakai) Hassegawa nom.sched.et comb. nov.
 + var. *ambiguum* (Pax) Rehder, Man.Cult. Trees ed.2, 570 (1940) オニイタヤ
A. pictum var. *ambiguum* (Dippel) Pax in Engl., Bot.Jahrb.16:401(1892)
 var. *glaucum* (Koidz.) Honda in B.M.T. 46:373(1932) ウラジロイタヤ
A.pictum var. *glaucum* Koidz., Rev.Acerac.Jap.:64(1911)
 var.*mayrii* (Schwer.) Koidz.ex Nemoto, Fl. Jap. Suppl.:451(1936) アカイタヤ
A. pictum var.*mayrii* (Schwer.) A.Henry in Elwes et Henry,Tr.Gr.Brit.Irel.3:662(1908)
 var. *glabrum* (Lev.et Vnt.) H.Hara, Enum. Sperm. Jap. 3:105(1954) エゾイタヤ
A.pictum var. *glabrum* (H. Lev et Vaniot)Hassegawa nom.sched.et comb. nov.
 var. *taishakuense* K.Ogata in J.Geobot.12:94(1964) タイシヤクイタヤ
A. pictum var. *taishakuense* (K.Ogata) nom.sched.et comb. nov.
 var. *savatieri* (Pax) Nakai, Rep. Veg. Koryo 45(1932)p.p. イトマキイタヤ (excl. var.)
A. pictum var. *savatieri* Pax inEngl., Bot.Jahrb.7:236(1886) p.p.
 *イタヤカエデの数多くの変異分類群は色々の見解があることは承知しているが、ランクを種々に設けず、当面すべて変種に扱うことにした。イトマキイタヤは混合品のため変種ランクから除外した。フイリイタヤカエデ var.(vel form.) *marmoratum* も遺伝学的にみてどの変種にも頭われ、成因も種々あるので分類群として認め難いので除外した。
 Sect. 9. *Campestris* Pax in Engl., Jahrb.6:327(1885) クロビイタヤ節
Acer miyabei Maxim. in Bull.Acad.Imp.Sci.St.-Petersbourg 32:485(1888) クロビイタヤ
 var. *shibatae* (Nakai) H.Hara in Bot.Mag.Tokyo 64:79(1951) シバタカエデ
 + Sect. 10. *Trifoliata* Pax in Engl., Bot.Jahrb.6:326(1885) メグスリノキ節
 + *Acer maximowiczianum* Miq in Arch.Neerl.Sci.Exact.Nat.2:472(Dec.,1867) メグスリノキ (チョウジャノキ)
 + Sect. 11. *Integrifolia* Pax in Engl., Bot.Jahrb.6:327(1885) トウカエデ節
Acer itoanum (Hayata) H.L.Li in Pacific Sci.6:289(1952) クスノハカエデ
 + *Acer buergerianum* Miq. Ann.Mus.Bot.Lugd.-Bat.2:88(1865) トウカエデ (栽培品)
 Sect.12. *Ginnala* Nakai in Bot.Mag.Tokyo 29:25(1915) ; Sect.Trilobata Pax カラコギカエデ節
Acer ginnala Maxim. in Bull.Ci.Phys.-Math.Acad.imp.Sci.St.-Petersbourg 15:126(1856)
 var. *aidzuense* (Franch.) K.Ogata in Bull.TokyoUniv.Forest no.60:27(1965) カラコギカエデ
 + Sect.13. *Rubra* Pax in Engl., Bot.Jahrb.6:326(1885) ハナノキ節
Acer pycnanthum K.Koch in Miq., Ann.Mus.Bot.Lugd.-Bat.1:250(1864) ハナノキ
 + *Acer rubrum* L.Sp.Pl.1055(1753) アメリカハナノキ (栽培品)
 + Sect.14. *Lithocarpa* Pax in Engl., Bot.Jahrb.6:328(1885) ; Sect.Diabolica Koidz. カジカエデ節
 + *Acer diabolicum* Blume ex K.Koch in Miq., Ann.Mus.Bot.Lugd.-Bat.1:251(1864) カジカエデ (オニモミジ)
Acer amamiense T.Yamazaki in J.Jpn.Bot.75:282(2000) アマミカジカエデ
 + Sect.15. *Indivisa* Pax in Engl.,Bot.Jahrb.6:327(1885) チドリノキ節
 + *Acer carpinifolium* Sieb. et Zucc.in Abh.Math.-Phys.Cl.Koenigl.Bayer.Akad.Wiss.4(2):154(1845) チドリノキ(ヤマシバカエデ)
 + Sect.16. *Negundo* Pax ネグンドカエデ節
 + *Acer negundo* L.Sp.Pl.1056(1753) トネリコバノカエデ・ネグンドカエデ (栽培品)

注：+は、神奈川県に自生または植栽のあるもの。北米産のカエデや園芸品は一括した項目で取り扱う。

追記

*旧カエデ科は2属を含みキンセンカエデ属(金銭槭) *Dipteronia* Oliv. が中国に2種1変種ある。この属は羽状複葉で冬芽が裸芽、果の翅は果実を取り巻き貨幣のように円形である。カエデ科は2属200余種が北半球冷温帯に分布、わずかに亜熱帯の1000-2500mに生育する。
 *山崎 敬はテツカエデを2亜種4変種に纏めた

が亜種のランクを加えず、単に4変種に組んだほうが良かったのではないかと考えている。

* Thunberg は 1793 年の論文中に 1784 年の『FLORA IAPONICA』の *Acer pictum* と *Acer septemlobum* を Synonym に加えており、やはり *Acer pictum* Thunb. は使用できない。

*新版『神奈川県植物誌』に掲載する神奈川県産の種は本稿にすべて含まれているので、その使用

目次

深町篤子：ジンジソウを世附で確認.....	991
佐々木あや子：マメ科の日本新産帰化植物 2 種.....	992
勝山輝男・鹿野沙耶香アカネ科の帰化植物ハリフタバモドキ.....	993
田中徳久：多摩川河口のウラギク健在?!.....	995
小野有紀子・木場英久：『寺崎日本植物図譜』に含まれる神奈川県産の植物.....	995
長谷川 義人：カエデ科イタヤカエデ節イタヤカエデの学名考察 ならびにカエデ属の使用学名提案.....	998
総会のご案内.....	1002
編集後記.....	1002

名をここでは提案した。ご意見は慎んで受けるのでお聴かせ下されば参考にする所存である。

*筆者はあまりランクで固めたものを好まないの
で大井次三郎博士のように亜種を創らず、種・変
種でまとめる方式に賛成する立場であることを表
明する。

*節分類に関しては緒方 健氏の節分類をそのまま
参照し、Sect.11. に栽培品のトウカエデを補充した。

*行頭に+記号のあるものは神奈川県に産する種
類である。ただし型 form. (品種) については微
少のものが大半で煩雑となるので省略した。主要
なものは記述中に補足する予定である。

*北米大陸 (アメリカ・カナダ) 産などの移入種
が数種あるが、外国産であり神奈川県産でないの
で代表的な種を列挙するに留めたい。

参考文献

- 方 文培, 1979. 中国槭科植物志予報. 植物分類学報,
17(1):60-86. 中国植物学会 (科学出版社), 北京.
方 文培ほか, 1981. 槭樹科. 中国植物志, 第 46 卷.
pp.66-273. 中国科学院 (科学出版社), 北京.
方 文培. 2004. 槭樹科. 鄭万鈞主編, 中国樹木志, 第
4 卷. pp.4242-4336. 中国樹木志編輯委員会, 北京.
小泉源一, 1933. Thunberg's Herbarium を訪ふ. 植物
分類地理, 2: 296-305.

中井猛之進, 1935. 本書ノ内容ニツキテ. in
Shokubutu Bunken Kanko-kai ed, Miscellaneous
Paper regrding Japanese Plants written by C.P.
Thunberg. pp.(1)-(20). Shokubutu Bunken Kanko-
kai, Tokyo.

緒方 健, 1964. 本邦産イタヤカエデ類について (一)
(二) (三). 北陸の植物, 12(4): 94-97, 13(1): 15-18,
13(2): 34-38.

OGATA K., 1999. Aceraceae. Flora of Japan, Vol. IIC.
pp. 60-73. 講談社・丸善, 東京.

OHASHI H., 1993. Nomenclature of *Acer pictum*
Thunberg ex Murray and its Infraspecific
Taxa(Aceraceae). Journ.Jap.Bot., 768: 315-325.

大橋広好・中井秀樹, 1996. Thunberg, Kaempferus
Illustratus sectio secunda の学名の整理, 特に
Murray, Systema Vegetabilium ed.14 と Thunberg,
Flora Japonica の学名との比較. Journ.Jap.Bot.,
71: 105-119.

YAMAZAKI T., 2000. Local variation of *Acer*
nipponicum Hara. Journ.Jap.Bot., 775: 111-115.

YAMAZAKI T., 2000. A New Species of *Acer* from
the Ryukyus. Journ.Jap.Bot., 775: 282-284.

*他にもカエデ科には重要文献 (小泉源一, 中井
猛之進ほか) が多いがここでは省略した。

総会のご案内

2017 年度の総会は平成 29 年 4 月 16 日 (日)
13:30 ~, 生命の星・地球博物館講義室で開催し
ます。調査の進捗状況の報告などに加え、横須賀
市自然・人文博物館の山本 薫 学芸員に講演を願
いしました。万障お繰り合わせの上、ご参集下さい。

編集後記

Flora Kanagawa は 1979 年に刊行した第 1 号より
通して頁番号を振って来ましたが、今号で 1,000 頁
を超えました。今までも、ページネーションを変

更しようと思ったこともありますが、そろそろ真剣
に考える頃合いでしょうか。それとも行ける所まで
行くべきでしょうか。次号は総会終了後の 5 月には
発行したいと思っておりますので、4 月を締切にしたい
と思っております。よろしくお願ひします。(田中徳久)

神奈川県植物誌調査会

〒250-0031 小田原市入生田 499
神奈川県立生命の星・地球博物館内
TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846
e-mail kana-syoku@flora-kanagawa2.sakura.ne.jp
郵便振替 00230-5-10195
加入者名 神奈川県植物誌調査会
年会費 2,000 円